

社会参加する高齢者の時間的展望とうつ病入院患者との比較

○ 渡辺純子(昭和大学)・佐久間伸一(国際医療福祉大学)

キーワード：時間的展望テスト, 感情調, 高齢者, うつ病入院患者, 趣味

目的

うつ病者は、自己の辛さを「前から、不安な気持ちが続いている」という時間軸で述べる事が少なくない。うつ病の入院患者は、未来展望がなく、現在の自己受容ができず、ネガティブな過去に執着しており、社会的交流も貧困であり、二分思考であることが多い(渡辺, 2014)。本研究では、うつ病入院患者と対照的な社会参加する高齢者に焦点を当て、臨床場面での高齢者への効果的支援を探るために、健常高齢者の時間的展望を調査したものである。

方法

東京都世田谷区が開設している区民講座に参加している60歳代から80歳代までの高齢者84名(男性37名, 女性47名)を調査対象とした。

本調査では、勝俣ら(1973)が開発した時間的展望テスト(TPT)を実施した。このテストは、「あなたが最近2週間(半月)の間に考えたり、人に話したことを25あげてください。どんなことでもよいですから、頭に浮かんだ順に、挙げてください。どんなことを言ったら良いとか悪いということは一切ありませんから、ありのままに挙げてください」という教示を与えることから開始される。

上記の教示にはじまり、関心事・話題の列挙(目標25項目)、関心事・話題のコミュニケーション状況(思考と伝達の区分)、時間的的定位分類(過去, 現在, 未来の分類を求める)、ならびに感情調と重要度についての回答を得た。感情調は、反応(関心事・話題)に対する感情的意味あるいは感情の調子についての快・不快の主観的評価(-2, -1, 0, +1, +2の5段階の評定: 「-2 非常に不快である」~ 「+2 非常に快である」)であり、重要度は、自己にとっての反応の重要性の程度の主観的評価(-2, -1, 0, +1, +2の5段階の評定: 「-2 非常に重要ではない」~ 「+2 非常に重要である」)である。また、これらの成績をうつ病入院患者の成績(渡辺, 2014)と比較考察した。

本研究は、昭和大学保健医療学部人を対象とする研究等に関する倫理委員会の承認を受け実施した(承認番号: 360)ものである。調査をするにあたり、開発者の勝俣に、時間的展望テスト(TPT)を試行することの承諾を得た。また、発表に関連し、開示すべき利益相反関係にある企業などはない。

結果

高齢者84名のTPTの傾向は以下の通りであった。

(1) 反応数において、教示は25項目としたが、回答の平均反応数は17.6(±7.8)であった(括弧内は±標準偏差値)。

(2) 時間的的定位では、現在指向(現在のみのこと, 過去から現在につづくこと, 現在から未来につづくこと, 過去・現在・未来とつづくこと)が57.4%, 未来指向(未来のみのこと)が28.7%, 過去指向(過去のみのこと)が13.9%であった。全体として現在指向優位であった。(3) 感情調についてみると、「快感情」32.8%(+2が14.1%, +1が18.7%), 「どちらでもない」35.1%, 「不快感情」32.1%(-2が14.8%, -1が17.3%)と分類された。関心事・話題に対して表出される「快」, 「不快」, 「どちらでもない」という感情調に、大きな差異は認められなかった。(4) 重要度においては、「重要である」が68.1%(+2が32.2%, +1が35.9%), 「どちらでもない」が27.3%, 「重要ではない」が4.6%(-2が

1.1%, -1が3.5%)であった。関心事・話題に対して、大部分が「重要である」出来事として報告した。(5) 対人関係についてみると、関心事・話題の「他者への伝達」が49%, 関心事・話題を「自己のみで考えた」が52%であった。関心事・話題に対して、両者に大きな差異は認められなかった。また、高齢者は、家族, 友人等とコミュニケーションを図っていた。

次に、現在展望に区分された内容について、高齢者が「快感情」をもつ関心事・話題をカテゴリーに分類した。その結果、「趣味」が55%, 「家族との交流」が17%, 「友人との交流」が11%, 「健康のこと」が7%, 「社会問題」6%, 「ボランティア」3%, 「食事のこと」が1%を示した。一方、高齢者が「不快感情」をもつ出来事をカテゴリーに分類した結果では、「身体」が42%, 「家族のこと」が16%, 「今後のこと」が11%であった。今回の調査でも、趣味が最も快感情を満たしており、身体が最も不快感情につながっていた。これらの成績は、過去の報告と同様であった。

考察

高齢者の場合、回答の平均反応数は17.6であり、25項目の教示では回答に困難を生じていることがうかがえた。一方、渡辺(2014)のうつ病入院患者調査では回答数について、平均14項目の回答数を得ており更に困難であったことがわかる。

また、うつ病入院患者の時間的的定位では、現在指向が87.3%, 未来指向(未来のみのこと)が0%, 過去指向(過去のみのこと)が12.7%であった。ここで未来志向は見られなかった。感情調では、「快感情」15.8%(+2が10.7%, +1が5.1%), 「どちらでもない」5.6%, 「不快感情」78.6%(-2が71.6%, -1が7.0%)と分類され、不快感情が大部分を占めた。重要度においては、「重要である」が97.7%(+2が94.0%, +1が3.7%), 「どちらでもない」が2.3%, 「重要ではない」が0%であった。うつ病入院患者は不快で重要であることで関心ごとが日々占められていたのである。

同様に、現在展望に区分された内容について、うつ病入院患者が「快感情」をもつ関心事・話題をカテゴリーに分類すると、「趣味」が0%, 「家族との交流」が13%, 「友人との交流」が15%, 「健康のこと」が16%, 「食事のこと」が1%, であり、趣味に関する話題が、健常高齢者が41%であるに対して、全く表出されなかったことが特徴的であった。一方、「不快感情」をもつ出来事をカテゴリーに分類するとは、「身体」が74%, 「今後のこと」46%, 「家族」16%, 「経済のこと」2%であり、健常な高齢者とほぼ同様な傾向であった。

臨床場面で対象者の現在抱える問題にアプローチする場合、対象者の快感情を伴った現在展望・未来展望を築くのが好ましいと考える。健常高齢者は趣味のことを多く考えており、その他の話題も多岐にわたっている。今回の調査により、趣味の話題が臨床場面の対象者(うつ病入院患者のような)に取り込まれるようにする試みが重要ではないかと推察された。

(WATANABE Junko, SAKUMA Shinichi)